【主題】「自立した学習者」を育てる中学校社会科の授業デザイン

【副題】ルーブリックの活用と自由進度学習の充実を通して

【学校・団体名】　岩沼市立岩沼北中学校
【役職名・氏名】　教諭・曳地　祐人

1　主題設定の理由

予測困難な現代社会において、生徒には多様な人々と協働しながら新たな価値を創造する「自立した学習者」としての姿が求められている。学習指導要領においても「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実が示されており、特に社会科においては、単なる知識の暗記や一斉指導による受動的な学習から脱却し、自ら問いを立てて多角的に考察・表現する授業への転換が必要不可欠となっている。

現任校では、令和5年度に実施した学習アンケート調査の結果を踏まえ、令和6年度より校内研究のテーマとして「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を目指した授業デザイン」を設定し、今年度で3年目の取り組みを進めている。令和5年度の実態調査では、生徒はペアやグループ学習等の協働的な学びに対して「相手に説明することで理解が深まった」「ICTを用いた意見の即時共有が便利である」と肯定的な意識を持っていることが明らかとなった。

しかしその一方で、「自ら課題を設定して主体的に学習に取り組むこと」に対しては消極的な回答が多く、基礎的・基本的な知識・技能の定着についても自信を持てずにいる課題があがった。すなわち、本校生徒の課題は「主体的に考え抜く力」と「確かな学びの定着」にあり、これらを改善するためには、単元や時間の目標を生徒自身が意識して学びを「見通し、振り返る」ことと、自らの学びの過程を「自己調整」する力を育成することが重要と捉えた。

筆者は令和6年度より、この校内研究の推進と連動しながら、自らの専門教科である社会科において「自立した学習者」の育成を目指し、2年間にわたり授業改善に取り組んできた。担当する生徒の実態を観察すると、協働学習には意欲的に取り組むものの、個人の思考を深める前に友達の意見をそのまま写して満足してしまう姿が散見され、個としての確かな理解や思考力の深まりに結びついていない場面が見られた。また、単元のゴールや評価基準の達成状態を具体的に把握できていないために、自身の状況に応じて学習方法や進度を適切に選択・修正する「自己調整力」を十分に発揮できずにいた。そこで、生徒自らが学びのゴールと現在地を客観的に把握し、主体的に調整を繰り返すことのできる授業デザインの構築に取り組むこととした。

2　研究の目的・方法

本研究は、中学校社会科において、生徒が受動的な姿勢から脱却し、自らの学びを客観的にコントロールしながら、必要に応じて他者と協働して思考・表現できる「自立した学習者」を育成することを目的とする。

その目的を達成するため、本校の校内研究の方向性を基盤としつつ、筆者が令和6年度から現在まで社会科の現場で継続・改善してきた個人実践を主軸として研究を進めた。具体的には、単元全体を見通し学習のゴールを可視化する「単元ルーブリック」の活用と、生徒自身が学習形態や進度、使用ツールを主体的に選択・調整する「自由進度学習」を展開した。令和6年度の導入当初に生じた生徒の躓きや実態の課題に対し、指導手立てや学習環境の試行錯誤と修正を重ねることで、授業デザインを改善してきた。本研究の検証にあたっては、生徒アンケートによる意識や態度の変容の分析と、毎時間の振り返りシートの「2点記述」の分析を組み合わせることで、手立ての有効性を明らかにする。

3　実践内容

（1）ルーブリックによる「見通し」と「自己評価」の構造化

① 単元全体の「見通し」を持たせる単元構想

一斉指導による受動的な暗記学習から脱却し、生徒自身が目標を認識して主体的に学びを進められるよう単元の構造化を図った。単元の導入段階において、単元全体を通じて解決すべき「単元を貫く問い」を提示し、各時間の学習内容が単元全体のどこに位置付くのかを明記した一覧表を共有した。毎時間の冒頭で「本時は単元のどのステップに位置しているのか」を生徒自身に確認させることで、1時間ごとの学習を孤立さ

せず、単元全体のストーリーの中に位置付ける連続的な見通しを持たせる手立てとした。

題材名：個人の尊重と日本国憲法

単元を貫く問い・・・「日本国憲法が保障する憲法を守るために自分たちはどのように社会に関わるべきだろう？」

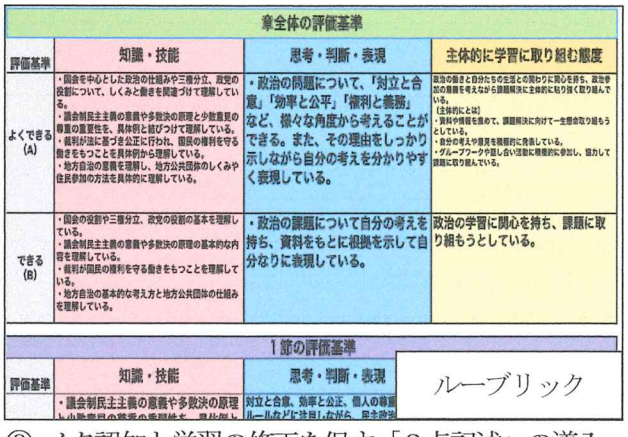
時間	日付	学習課題	まとめ（学んでわかったこと）	振り返り（自分自身の学び方を振り返ろう）
1時間目		なぜ政治は「人の支配」ではなく、「法の支配」によって行われる必要があるのだろう？		
2時間目		日本国憲法はどのような考えに基づいて作られているのだろう？		
3時間目		国民主権が大切にされているのはなぜだろう？		
4時間目		平和主義が大切にされているのはなぜだろう？		
5時間目		単元テスト・節のまとめ		
6時間目		共生社会を築いていくために、私たちにはどのような取り組みが求められているのだろう？（Part1）		

小単元の一覧と振り返りシート

②評価基準の可視化と生徒目線への改善

実践初期（令和６年度前期）は、教師側の評価基準をほぼそのまま提示していたため、記述が抽象的で難しく、生徒にとって「どのような状態になれば十分な達成と言えるのか」が不透明な状態であった。そのため、評価基準が目標設定として機能しにくい課題が生じた。そこで、生徒が自らの記述や思考を照らし合わせられるよう、生徒目線の具体的な言葉へ変更を行った。特に社会科で差が生じやすい「思考・判断・表現」の観点では、具体的な評価基準を提示した。

公民の政治分野の評価基準を例に挙げると、B 評価：「政治の課題について自分の考えを持ち、資料をもとに理由を示して自分なりに整理している」と、さらに高めたい A 評価：「政治の問題について『対立と合意』『効率と公平』『権利と義務』など、様々な角度から考えることができる。また、その理由もしっかり示しながら自分の考えを分かりやすく表現している」などの違いを明確に提示した。さらに毎時間の冒頭でこのルーブリックを確認させ、目指すべきゴールを意識させる指導を行った。



章全体の評価基準

評価基準	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
よくできる（A）	・国会を中心とした政治の仕組みや三権分立、政党の役割について、しくみと働きを関連づけて理解している。 ・議会制民主主義の意義や多数決の原理と少数意見の尊重の重要性を、具体例と結びつけて理解している。 ・裁判が法に基づき公正に行われ、個人の権利を守る働きをもつことを具体例から理解している。 ・地方自治の意義を理解し、地方公共団体のしくみや住民参加の方法を具体的に理解している。	・政治の問題について、「対立と合意」「効率と公平」「権利と義務」など、様々な角度から考えることができる。また、その理由をしっかり示しながら自分の考えを分かりやすく表現している。	政治の働きと自分たちの生活との関わりに関心を持ち、政治参加の意義を考えながら課題解決に主体的に取り組んでいる。 【主体的とは】 ・資料や情報を集めて、課題解決に向けて一生懸命取り組もうとしている。 ・自分の考えや意見を積極的に発表している。 ・グループワークや話し合い活動に積極的に参加し、協力して課題に取り組んでいる。
できる（B）	・国会の役割や三権分立、政党の役割の基本を理解している。 ・議会制民主主義の意義や多数決の原理の基本的な内容を理解している。 ・裁判が個民の権利を守る働きをもつことを理解している。 ・地方自治の基本的な考え方と地方公共団体の仕組みを理解している。	・政治の課題について自分の考えを持ち、資料をもとに根拠を示して自分なりに表現している。	政治の学習に関心を持ち、課題に取り組もうとしている。

1節の評価基準

評価基準	知識・技能	思考・判断・表現
	・議会制民主主義の意義や多数決の原理と少数意見の尊重の重要性を、具体例と	対立と合意、効率と公正、個人の尊重

ルーブリック

③ メタ認知と学習の修正を促す「２点記述」の導入

振り返りが単なる感想や達成感の記述に終始するのを防ぐため、振り返りの形式を「まとめ」と「振り返り」の２点に整理して記述・蓄積させる指導を行った。

１点目の「まとめ」は、本時の問いに対する自分なりの考察や獲得した知識を言語化させ、理解の定着を図る役割を持たせた。２点目の「振り返り」では、知識ではなく「自身の学びに向かう姿勢や、選択した学習方法そのもの」を客観視（メタ認知）させ、次時の学習修正に繋がる記述を行わせるよう指示した。明確なゴール（ルーブリック）とセットで提示することで、自身の学習プロセスを客観的に捉え直す機会とした。

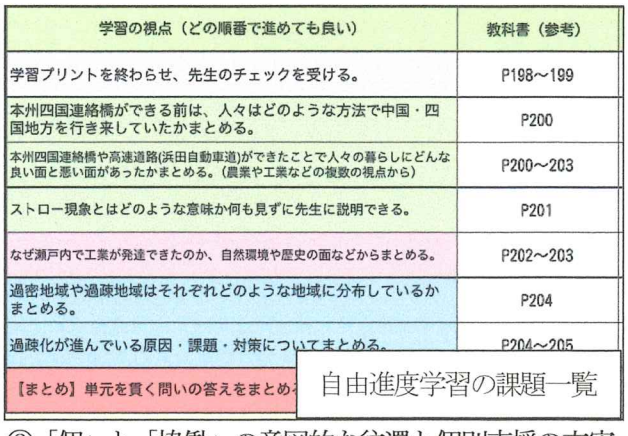
（２）自由進度学習を通した「個」と「協働」の往還

① 課題の具体化と「個」の思考の保障

生徒自身が進度や学習方法を調整しながら学ぶ環境を整えるため、第２学年地理的分野「中国・四国地方」（全５時間）などで自由進度学習を導入した。本単元では「本州四国連絡橋や高速道路の開通は、人々の生活や地域にどのような影響をもたらしたか」という単元を貫く問いを設定した。

令和６年度の実践当初は、単元を貫く問いを解決する前段階の小課題として「中国・四国地方の自然環境や産業について調べる」という抽象的な小課題提示を行っていた。そのため、自立的な学習に慣れていない生徒は「何から手をつけ、どこまで書けばよいか分からない」と困惑し、探究の視点がぶれて手探りの作業に時間を費やしてしまう課題が生じた。

この実態を受け、令和７年度は小課題を「本州四国連絡橋ができる前の移動方法をまとめる」「過密・過疎地域の分布を資料から読み取る」といった、分析対象と学習内容が明白な具体的課題へ変更した。課題の具体性を示したことで生徒に見通しを持たせ、自分のペースで資料と向き合う「個の学び」の時間を確保した。



学習の視点（どの順番で進めても良い）	教科書（参考）
学習プリントを終わらせ、先生のチェックを受ける。	P198～199
本州四国連絡橋ができる前は、人々はどのような方法で中国・四国地方を行き来していたかまとめる。	P200
本州四国連絡橋や高速道路(浜田自動車道)ができたことで人々の暮らしにどんな良い面と悪い面があったかまとめる。(農業や工業などの複数の視点から)	P200～203
ストロー現象とはどのような意味か何も見ずに先生に説明できる。	P201
なぜ瀬戸内で工業が発達できたのか、自然環境や歴史の面などからまとめる。	P202～203
過密地域や過疎地域はそれぞれどのような地域に分布しているかまとめる。	P204
過疎化が進んでいる原因・課題・対策についてまとめる。	P204～205
【まとめ】単元を貫く問いの答えをまとめ	

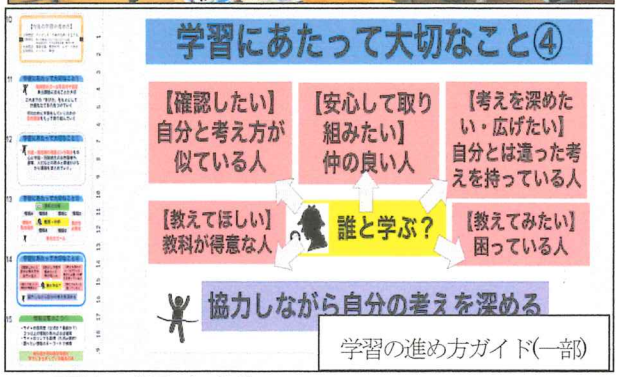
自由進度学習の課題一覧

②「個」と「協働」の意図的な往還と個別支援の充実

「個」の思考を深める一方で、それが孤立した作業や友達の回答の単なる書き写しに終わらないよう、「個」と「協働」を主体的に往還する仕組みを設計した。

具体的には、大型モニターに進捗状況を提示し、進度の早い生徒が「ミニティーチャー」として他の生徒を支援する場面を設定した。これにより「自力で考える（個）」→「友達に相談する（協働）」→「自分のワークシートに戻り自身の言葉で再構築する（個）」というプロセスを促した。また、情報収集ツールやまとめの手段（手書きノート、スライド作成ソフト等）も自己選択させた。

ミニティーチャーを交えたグループワーク



学習の進め方ガイド(一部)

4 研究の検証と考察

（1）ルーブリック活用による「見通し」と「自己調整」の検証

① アンケート数値による検証

ルーブリックの有効性を検証するため、令和6年度の6月と12月に意識調査を実施した。

「ルーブリックを参考に、何を学ぶべきか明確になったか」という問いに対しては、肯定的な回答が6月の76%から12月には84%（+8%）へと向上した。評価基準を生徒の言葉で具体化・可視化したことで、生徒自身が学習のゴールを明確に捉えられるようになった成果と言える。

また、「ルーブリックを参考にして、自分の学習の計画を立てられるようになったか」については、6月の48%から12月には57%（+9%）へと伸びが見られた。目標を捉えるだけに留まらず、自身の現在地から逆算して学習方法や時間を調整する「自己調整力」が、生徒の中に着実に芽生えていることが数値からも裏付けられた。

令和6年度に実施した学習アンケート結果(一部抜粋)

アンケート内容	6月	12月	増減
ルーブリックを参考に、何を学ぶべきか明確になったと思いますか。	76%	84%	8%
ルーブリックを参考にして、自分の学習の計画を立てられるようになったと思いますか。	48%	57%	9%

②アンケートの自由記述や評価基準による生徒の意識変容の検証

ルーブリックに対する生徒の意識の質的変容を捉えるため、自由記述の変容を分析した。

6月段階では「授業の大体の内容を理解できた」「次の授業の内容が分かる」といった、教師から提示された学習予定や知識の受容に関する記述が中心であった。

しかし12月段階では、「評価の基準が分かり、目指せるところが正確に分かった」「最終的な学習のゴールが明確になっているから合理的」「どうすればいいか分かりやすくなった」といった記述が大きく増えた。

単なる「学習の手順」の把握から、自らの思考をどこまで高めるべきかという「目標の認識」へと転換が図られたことが分かる。

令和6年度に実施した学習アンケートの自由記述結果(一部抜粋)

項目⑩ルーブリックを使って学習して、良かったと思うことは何ですか。（原文ママ）

6月の自由記述	12月の自由記述
・どういうところが評価されたりとか、授業のだいたいの内容を理解できました。 ・何を勉強したかわかりやすい。 ・色々な人の考え方やまとめ方があり分かりやすいのがあって良いと思いました。 ・次の授業の内容がわかるから準備などができる。	・評価の基準が分かり、目指せるところが正確に分かった ・すぐ見て、次の授業何やるかがわかったり、最終的なこの学習のゴールが明確になっているから合理的 ・評価基準が分かるからどんな感じにすればいいか分かりやすくなった。

（2）自由進度学習を通した「個」と「協働」の往還の検証

① ワークシート・2点記述による「個の学び」の検証

自由進度学習において、具体化した小課題を設定したことによる「個の思考」の変容を、毎時間の振り返りシートの「まとめ」および「振り返り」の2点から分析した。

小課題を「本州四国連絡橋ができる前の移動方法」や「過密・過疎地域の分布」など具体化・精細化したことで、生徒は迷うことなく自力で資料に向き合う姿が見られた。また「学び方の振り返り」においても、「友達とまとめたスライドを見合いながらまとめ方や内容を改善することができた」「自分の説明における自信のあるところと不安なところを理解できた」といった記述が見られ、ICTツールを活用しながら自らの学びを客観的に評価（メタ認知）し、他者との協働を通

して主体的に表現方法や学習計画を修正・最適化する「自立した学習者」としての姿が確認できた。

・学んだこと 「～などがわかった、～が疑問だ」等	☆今日の自分の学び方のふりかえり
中国・四国地方の県名と県庁所在地名を理解することができた。そして四国地方の発展には大きく橋が関わっていると言うことがわかった。	Google Earthをうまく使ってガイダンスを聴くことができた。
本州四国連絡橋には、瀬戸大橋・しまなみ海道・明石海峡大橋・大鳴門橋があると言うことがわかった。	今日は中国・四国地方の橋についてまとめた。そして最後の方に自然環境についてまとめた。
中国・四国地方には3つの地域に分けることができて、山陰・瀬戸内・南四国があると言うことがわかった。そして地域ごとに季節風の影響で特徴があると言うことがわかった。	今日は自然についてまとめた。結構スムーズに進めることができて、気候と暮らしについてまとめることができた。途中に友達のまとめ方や、内容を参考にしながら取り組むことができた。
中国・四国地方の発展には大きく本州四国連絡橋だけでなく、浜田自動車道なのど高速道路も深く関わっていると言うことがわかった。	今日は少人数教室で自分がまとめた交通面での発展を友達に自分なりに説明することができた。自分で交通面で自身のあるところや不安なところがどこかを理解することができた。
中国・四国地方には石油化学コンビナートがあるということがわかった。そして瀬戸内工業地域と呼ばれていることも理解できた。	今日は目標通りキーワードを意識してまとめることができた。途中で友達とまとめたスライドを見合いながらまとめ方や内容を改善することができた。

② 話し合い活動の自由記述による「対話・協働」の変容検証

自由進度学習における「個」と「協働」の往還が、いかに生徒の思考を深めたかを検証するため、令和７年に実施した学習アンケートの話し合い活動に関する意識の自由記述（6月と11月）を比較・分析した。

6月の記述では、「自分の考えと友達の考えを比較できる」「分からない部分を聞いて減らす」など、他者から答えを得る受動的な比較や質問に留まる意見が散見された。これに対し11月の記述では、「自分とは違う考えを知ったり、同じ考えでも違う根拠に納得したりすることで、自分の考えを深めることができる」「他者の意見を聞いて自分の意見を補強する」「分からない課題があった時には一緒に考える」といった記述へと深化が見られた。

学習アンケート結果(令和７年度実施)

項目⑫話し合い活動や友達と学習することにおいて、どのような点が自分の学びに役立っていると思いますか？（原文ママ）

6月の自由記述	11月の自由記述
自分の考えと友達の考えを比較することができる	自分とは違う考えを知ったり、同じ考えでも違う根拠に納得したりすることで、自分の考えを深めることができる点。
自分がわからないわからない部分を聞くことができ、それによってわからないが減る。	自分とは違う意見が出たりすると自分との意見を比べることができる。また、わからない課題があった時には一緒に考えることができるところ。
自分がわからないことを聞いて分かったり、別の考えを聞いて自分の意見を良くしたり出来る点。	他の人の意見を聞いて、自分の意見を補強したり比較したりできる点。

5 研究の成果と今後の課題

（1）研究の成果

本研究で、本校の校内研究の方向性を視野に入れつつ社会科において「自立した学習者」を育成することを目指し、改善したルーブリックの活用と自由進度学習を取り入れた授業デザインの実践に取り組んできた。

実践を通して得られた成果は以下の２点である。

１つ目は、学習のゴールと質が可視化されたことで、生徒自らが学びを見通し、調整する学習姿勢が育まれた点である。改善したルーブリックにより学びのゴールが明確化し（6月76%→12月84%）、目標から逆算して学習計画を調整する行動（48%→57%）や、自らICTツールを活用して表現方法を選択する姿が見られるようになった。

２つ目は、「個」と「協働」の往還により、思考の深化が図られた点である。単に友達の記述を書き写す受動的な学習から脱却し、「自らの思考を比較・補強し、より深めるために他者と対話する」という、自立した学習者としての姿勢が見られるようになった。

（2）今後の課題

一方で、生徒をより自立した学習者へと高めていく上での新たな課題も明らかとなった。

令和７年度に実施した学習アンケート調査における「根拠を持って意見を発信できているか」の項目で、6月の81.4%から11月には76.5%へと数値の微減が見られた。これは、主体的に学習を進める中で、生徒自身が「単なる主張ではなく、資料やデータを根拠として論理的に表現することの難しさ」を認識した結果と捉えた。

学習アンケート結果(令和７年度実施)

項目	アンケート内容	6月	11月
④	グループ活動やペアの時間に、誰とでも話し合うことができていますか。	83.1%	72.9%
⑨	意見交換の場で、自分の意見を根拠を持って発信することができていると思いますか。	81.4%	76.5%

本実践で育まれた「自立的に学習を進める土台」をさらに発展させるため、今後は一斉指導の場面における「説明の構成モデル（結論→根拠→まとめ）」の提示や、提示する資料の精選、「どのようなデータを根拠とすべきか」を視覚的に整理するシンキングツールの活用など、個の学びを「根拠を持った確かな言葉」として再構築していくことが求められる。この手立てを重ねることで、協働で得た気づきを自分一人の表現へと昇華させた、「自立した学習者」の育成を確かなものとしていきたい。

参考資料

難波駿一2023「超具体！ 自由進度学習はじめの１歩」（東洋館出版社）

蓑手章吾2021「子どもが自ら学び出す！ 自由進度学習のはじめかた」（学陽書房）